

〈研究動向〉

ドイツ・ハノーバーの国際女性大学に参加して

——「ヨーロッパ初の女性による、女性のための、女性についての大学」——

篠崎 香子

はじめに

2000年7月17日から10月15日までの3ヵ月間、ドイツのハノーバー市で「ヨーロッパ初の女性による、女性のための、そして女性についての大学」(ifu 2000a, p. 8)と謳われる国際女性大学(英語で International Women's University、ドイツ語では Internationale Frauenuniversität、以下 IFU と略称する)が開催された。そこに参加する機会を得た一人として、以下、この大学が取り組んだ画期的な試みについて紹介したい。端的に言って、IFUでの3ヵ月は、確立された欧米そして日本中心の教育機関に慣れきっていた私にとって、驚きと不安の連続だったが、その経験に基づきつつ IFU の意義についても自分なりの考えを述べることにしたい。まず初めに国際女性大学の概要説明を行う。そのうえで、私自身が参加した「移動」研究部門を中心に授業内容を紹介し、最後に、国際女性大学の内外での反響に触れながら、IFU の展望について述べる。

1. 国際女性大学について

1-1. 設立の経緯

IFU には、世界115ヵ国から数にして900人の女性が参加した。この夏期大学では、従来の伝統的な学問領域の分割に代えて、6つの学際的な研究部門——「身体、都市、情報、労働、移動、水 (body, city, information, work, migration, water)」——が設けられた。それぞれの部門で大学院レベルの授業と演習が提供された。また、これらの研究部門はハノーバー市を拠点として、ドイツのその他5都市で開催された。

IFU は構想の段階から国際的なプロジェクトとして計画されていたが、その設立の契機は、ドイツのアカデミアにおいて女性学およびジェンダー・スタディーズを実施するというドイツ国内での動きに由来している。この構想は、1994年に女性の研究に関する第一次ニーダーザクセン委員会の報告書にまず表明された。同報告書はヘルガ・シューハート連邦教育・研究省大臣に女性大学の設立を勧告している。その後、同勧告は、女性の研究に関する第二次ニーダーザクセン委員会に取り上げられ、5つの研究視点が定められたことによって、女性大学の構想はより明確に示された。その5つの研究視点とは、「知性、情報、身体、水、都市 (intelligence, information, body, water, city)」である。1997年1月、同委員会による関連報告書の公表を受け、シューハート大臣は IFU プロジェクトへの支援を表明した。これが IFU の始まりである。

その後、1997年夏から IFU プロジェクト内容の具体的な構想が練り始められる。同時期に、IFU は組

織面からも強化された。1997年7月に IFU の支援団体（Internationale Frauenuniversität e.V.）が協会として登録され、さらに1999年3月には、ニーダーザクセン州と国際女性大学協会が IFU を非営利有限会社（Internationale Frauenuniversität GmbH）として設立した。

こうして創設された IFU は、以下の5つの目的を掲げている。

- ・女性研究者（中堅および若手）に、IFU の6つの研究領域で独自の成果を発表する機会を提供する。
- ・女性研究者（中堅および若手）たちの革新的な能力を活用するために、彼女たちの連帯的で学際的な教育と研究をそれぞれのトピックに基づいて奨励する。
- ・女性研究者に対し、既存の学術組織を強化し、学問領域の内容を豊かにするような、世界レベルでの恒常的ネットワークを開く。
- ・女性学アプローチのパラダイム変換がもたらす革新的な効果とともに国際協力の意義を深める。
- ・芸術家や科学者によって用いられている理論、概念、および戦略を織り込んでゆく。

これらの目的を達成するために、IFU は指針となる5原則を打ち出している。

- ・科学と社会の相互依存性と相互作用
- ・学際性
- ・科学と芸術を含む他の社会的実践との統合
- ・女性学とジェンダー研究の具体化
- ・国際的かつ異文化間的視野

1-2. 組織的および法的編成

先に述べたように、IFU は登録協会と有限会社から成り立っている。その組織を見ると、IFU は学術事項に関して最高の意思決定を行う審議会（Council）、監督評議会（Supervisory Board）そして信託評議会（Board of Trustee）から構成されている。審議会は学長（アイラ・ノイゼル博士）、6研究部門長、ならびに IFU の全研究部門で共通に必要なとされる3領域の主任（Virtual IFU、略して VIFU と呼ばれる IFU の通信情報領域、IFU の評価担当領域および芸術コンセプト領域の主任）、そして常設客員から成る。9人の信託評議員は IFU の監督評議会から任命される。その任務は学術事項に関する助言を IFU に行うこと、IFU プロジェクトの遂行過程を観察し評価を行うこと、さらに2000年以降の IFU 存続のための支援を行うことである（ifu 2000b、vifu 2000）。

IFU 運営に際し、ハノーバー市を拠点としてその他3都市に事務所が設けられた。ハノーバー市では「移動」、「労働」、「身体」の3研究部門が開催され、カッセル市では「都市」、ハンブルグ市では「情報」、そしてスーダーブルグ市で「水」がそれぞれ開講された（ただし「身体」はブレーメン、「労働」はクラオスタール・ツェラーフェルトにおいて、期間中2週間プログラムを実施した）。

1-3. 資金の出所

IFU は地方公共団体から連邦政府省庁、財団、企業にいたるまで多くの団体から財政援助を受けることによって実現した。一例を挙げると、地方公共団体の市レベルでは、科学と研究のためのハンブルグ市

評議会、ハノーバー市などが、州レベルでは、ヘッセン州科学芸術省、ニーダーザクセン州科学文化省、ニーダーザクセン州法務省およびヨーロッパ関係省など全6州8省がIFUの趣旨に賛同し、財政支援を行った。IFUは連邦政府からも援助を受けた。財団では、ドイツ学術交流会、フリードリッヒ=エベルト財団、ドイツ環境連邦財団、ハンス=ボックラー財団、ハインリッヒ=ポール財団、フォルクスヴァーゲン財団などが、さらに企業では、ドイチェ・テレコム、ドイツIBM、フォルクスヴァーゲン、Tモバイル、EXPO GmbHなどである。合計46団体以上がIFUの開催・運営のために財政的援助という形で貢献した(vifu 2000)。また、新聞報道によると、奨学金を含むIFUの合計運営資金は1,800万マルク(約9億円)にのぼった(Die Welt 29 Juli, 2000)。

1-4. 参加者構成、教員構成

IFUに参加した学生、講師陣の多様性には目を見張るものがあった。すでに述べたように、学生は115の国と地域から約900人の女性が参加したが、講師陣については、60カ国から230人の女性がIFU夏期大学に集まった。学生の応募資格は、1) 女性であること、2) 学士あるいはそれに相当する学位を修了していること、3) 学業・研究が遂行できる英語能力が証明できることであった。1,500人余りの志願者から900人が審査を通過した。

「移動」に参加していた150人の女性たちとの関わりの中かで気づいた点として、まず挙げることができるのは、専門分野の多様性である。文学、芸術、哲学、心理学、社会学、法律学、情報技術など、専門領域別に組織されている通常の大学の環境では、専門領域を越えて学生が1つのトピックについて共に学び、研究を行うことはまれである。第2の特徴は、参加者が20歳代前半から50歳代までと年齢層が幅広いということ(他の研究部門には60歳代の参加者もいたということである)¹。第3に、このことにも関連するが、IFU参加者は、学生であっても、普段の生活では大学教員であったり、NGO活動家であったり、またその双方であったりと、そのバックグラウンドの多様性が印象的であった。他方でこの多様性ゆえに、時折、学生間あるいは学生と講師陣との間で激しい衝突があった。

以上、主にIFUの全体像について簡単に紹介した。以下では、IFUのなかでも私が実際に参加した「移動」研究部門での見聞を紹介したい。

2. 「移動」研究部門

IFUの「移動」研究部門はハノーバー大学において開催された。この3ヵ月間のカリキュラムは第1週目(7月17日~23日)のオリエンテーション・ウィークを皮切りに、講義中心の前期(7月24日~8月27日)とワークショップ中心の後期(9月4日~10月8日)とから構成されていた。ここでは初めに、前期・後期のカリキュラム構成を概観した後、学生が前期・後期を通して一貫して参加したプロジェクト・グループについて紹介する。

前期の間、学生は、原則的に午前9時30分から午後1時まで2人の講師による1コマ90分の講義に2コマ出席するというのが午前中のルーティーンだった。授業はクラスターと呼ばれる構成単位(各クラスターは1週間続く)によって編成されていた。「移動」研究部門には以下の4つのクラスターがトピックごとに設定されていた。「移動、移動性、トランスマイグレーション(Migration, Mobility, Transmigrants)」、「ナショナリズム、レイシズム、エスニシズム(Nationalisms, Racisms, Ethnicisms)」、「形成過程の空

間、文化、アイデンティティ (Spaces, Cultures, Identities in Process)」、[「超国家的ジェンダー民主主義 (Trans-national Gender Democracy)」。とはいっても、実際には、1つのクラスターを他のクラスターから区別する明確な境界線は引きにくいというのが多くの参加者の意見であった。というのも、別々のクラスターに分けられているはずの複数の講義に多くの共通点があったり、講義がその属しているクラスターの内容と関連性が見出せないこともあったからだ。

それでもあえてクラスターの授業構成内容の特徴を挙げるとすれば、例えば以下のように言えるだろう。「移動、移動性、トランスマイグランツ (Migration, Mobility, Transmigrants)」のクラスターにおいては、移動に関する概念についての議論が中心的であった。それぞれの講師が自分自身の研究を具体的事例として挙げ、移動イコール定住化という図式の不適切さ、プッシュ・プル理論への批判、構造主義的アプローチの限界、行為主体性に重きを置くアプローチの重要性、世帯における移動に関する意思決定の際のジェンダーと権力のポリティックス、移民女性がつくるネットワークやコミュニティなどについて議論を展開した。「ナショナリズム、レイシズム、エスニシズム (Nationalisms, Racisms, Ethnicisms)」のクラスターでは、ネーションにおける移民の排除が様々な形で行われているということが講義の核になっていたと思う。その排除には、ジェンダー、家族、アイデンティティなどが、鍵の概念として作用しているということがヨーロッパと北米の事例を通して、それぞれの講師の専門領域の視点を反映する形で論じられた。

組織的な点から言うと、各講義の後あるいはそのクラスターの終わる木曜日の2コマ目の講義時間が質疑応答に充てられた。それぞれのクラスターには1名の講師が責任者としてついており、その講師が客員講師とのコミュニケーションと1週間つづくクラスターの授業構成を受け持っていた。

ここでアート・コンセプトという試みについて言及しておきたい。前期の最後の1週間(8月21~27日)は「芸術と科学の遭遇 (Art and Science Encounter)」という週だった。この期間に、芸術と科学の対話を通して学際性をさらに高めることが企図された。アーティストたちは映画やビデオ、ドキュメンタリー、インターネット・プロジェクトなどの手段を用いて、移動、ボーダー(国境線・境界線)、グローバリゼーション、アイデンティティに関する問題を提起した。このような芸術的表現手段を駆使した斬新な形式のプレゼンテーションから参加者たちが受けた影響は無視できない。IFUの最後に口頭発表と提出が義務づけられていた各自のプロジェクトにも、アート・コンセプトにヒントを得て完成されたものが多かった。また、後期に入ってからワークショップの講師として、ほとんど毎週アーティストたちがIFUを訪れた。

盛りだくさんのカリキュラムの中で緊張が続いた前期終了後、IFU参加者は講義室での勉強から1週間の休息を取った(8月28日~9月3日)。この休暇中も、IFUによってNGO、研究機関そしてドイツ企業などを訪問する小旅行が企画され、その機会を利用してドイツにおける諸事情について見聞を深めた学生も少なくなかった。

その後、後期に入り、IFUにおける午前中のカリキュラムは講義からワークショップへと移行した。1つのワークショップの継続期間は1週間で、学生は毎週月曜日の朝にワークショップ・オーガナイザーからワークショップに関する説明を聞いた後、その週どのワークショップに参加するかを決めるという仕組みだ。毎週5から7の新しいワークショップが開催された。扱われたトピックは非常に多岐にわたっており、ワークショップの進め方も、講読文献について議論する場合もあれば、オーガナイザーの「講義」を受ける場合もあった。

私個人は「インタビューおよび解釈ワークショップ」「ジェンダーの地理学ワークショップ」「家事労働者——国際比較ワークショップ」「アジア太平洋地域におけるジェンダー、移動、トランスナショナル・コミュニティワークショップ」に参加した。これらの小規模なワークショップにおいて、「出席している」状態からようやく「参加している」と思えるようになってくる。

前期には毎朝150人近い学生が講義室で講義を受けていたのと比較し、1ワークショップにはだいたい5～15人程度の学生が登録していた。比較的小規模なグループなので、オーガナイザーである講師や他の学生とより近くで接することができ、学生は概して積極的な参加、相互から学び合うことを楽しんでいたように思う。

前期と後期に分かれたカリキュラムは、3ヵ月間のプロジェクト・グループにおける作業によって全体としての関連がつけられる仕組みとなっていた。開講期間中、参加講師がIFUから出入りする状況で、唯一継続的に学生とコンタクトを持ち続けたのがプロジェクト・グループを取り仕切るチューターたちである。IFUが始まる1ヵ月前から既にハノーバー入りしたチューターたちは、各自が担当するプロジェクトの構想を具体化し、学生を指導するためのトレーニングを受けた。そしてIFU開始直後に、「移動」研究分野の学生を対象に15のプロジェクト・グループのプレゼンテーションを行った²。それをもとにどのグループに参加するかを決めた学生は、プロジェクト・グループで午後に週数回集まった。

プロジェクト運営がスムーズに行われるかどうかは、チューターの手腕によって大きく左右された。担当講師のもとチューターは1人あるいは2人でIFU期間中の予定を決め、グループ全体の講読文献を選定し、さらに場合によっては、講読文献集を事前に準備していた。機材が必要なグループはその使用申請のために見積もりを提出しなければならなかった。IFUが始まってからは、週数回のグループ・ミーティング（教授のいない日本の演習に最も近い）で司会・進行役を務め、グループ・メンバーに対して定期的に個別のチュートリアルを行うこともチューターの役目であった。このような仕事をこなすには専門知識だけでなく、教育経験、リーダーシップ、多様性を受け入れることができる能力など、多くの要件を必要とする。

私が参加していたプロジェクト・グループ“*At Your Service, Madam! Domestic Servants Worldwide: Gender, Class, Ethnicity and Profession*”では、チューターと担当講師の連携が円滑に行われた。博士論文執筆中のチューターは、ワークショップのトピックについて精通しているだけでなく、チューターとしての技量も備えていた（彼女自身、イギリスのチュートリアル制度のもとで4年間社会科学的訓練を受けてきた経験は無視できない）。またミーティングのときだけではなく、チュートリアルでも多くの有益な助言をしてくれた。私がこのグループに入る前に短期間参加したグループと比べ、家事労働者研究のグループでは、焦点を当てる地域に違いがあっても、扱うトピックが初めから特定化されていたことがプロジェクトを系統的に進行していくうえでプラスに作用したのではないだろうか。

IFUのコース修了要件の1つは成果の提出である。この個人の研究成果については、グループ・プロジェクトと同様、IFUの11週目に公开发表することが義務づけられていた。その公开发表では、芸術家との協力の下で様々な情報技術を用いた作品が目をつけた（芸術家と学者の共同プロジェクトの可能性については、Frankfurter Rundschau 3 August, 2000で報じられた）。「移動」をテーマにして、写真や音声を用いたCDの作成、ビデオ撮影、スライド制作、ホームページの作成、といった試みがなされた。

ここまではIFUの「移動」研究部門に実際に参加しての見聞を述べた。最後に、主に私個人のIFUの参加者との対話、ドイツのメディア報道に依拠しながら、IFUの展望についてまとめた。

3. IFU の展望

「女性大学」の存在意義は、フォーマルな場でもインフォーマルな場でも、IFU の開催期間中私の身の周りで最もよく議論がなされたテーマの1つであった。IFU がジェンダーの視点を強調しつつも、学生、講師ともに女性のみを参加の対象としていたため、学生からは以下のような意見が聞かれた。

- ・女性だけが集まって、勉強・研究ができることは素晴らしい。女性大学は存在意義を十分に持つ。
- ・「女性」という普遍的な生物学的カテゴリーに属していれば、学生も講師もあたかも何かを先験的に共有しているという前提があるのか。
- ・セクシュアリティについての問題がカリキュラムから完全に抜け落ちている。
- ・権力的なジェンダーの構造に批判的な男性講師や男性の参加候補者を排除するのは問題である。
- ・男性の存在がないところで行われるジェンダー研究は、女性研究や女性学とどう違うのか。
- ・男性を排除したジェンダー研究に将来的発展はあるのか。

私個人の生活史との関連で言えば、中学校以来、大学の学部期間を除いて女性だけあるいは女性が大多数の環境の中で過ごしてきたために、女性だけの環境それ自体を当然視する傾向にあった。しかし、IFU で知り合った友人や知人のうちで「女性大学」で学んだ人たちは非常に少なかったのである。

IFU の開催地となったドイツでも、IFU がドイツ史上初の女性大学だということでもかなりの反響があった。ここでドイツ各紙が IFU をどのように報道したかを簡潔に紹介しよう。1974年にベルリンで女性による自主的な夏期大学が開催されたものの（現在もドイツの他の地域で続いている）、それは大学というひとつの確立された高等教育機関として認識されていない³。フランクフルター・ルンシャオは、その上で、IFU がドイツ史上初の女性大学として夏期研究プログラムを開催したことの重要性についてコメントを出している（Frankfurter Rundschau 3 August, 2000; Frankfurter Rundschau 12 Oktober, 2000）。また、女性大学の長い歴史を持つアメリカ合衆国を例に挙げ、政治および経済分野でリーダーシップを発揮しているのはヒラリー・クリントンやオルブライト国務長官など女子大学卒業者であるという指摘も多く見られた（Goslarsche Zeitung 15 Juli, 2000; Hannover Allgemeine Zeitung 29 Juli, 2000; Landeszeitung für die Lüneburger Heide 15 Juli, 2000; Schaumburg-Lippische Landeszeitung 15 Juli, 2000）。

IFU のいまひとつの特徴として、参加者の国際性や、IFU のプログラムがドイツの大多数の大学で見られる伝統的な「学問領域」別ではなく、「学際的」に構成されているという点を取り上げている報道も目立った（Frankfurter Rundschau 3 August, 2000; Süddeutsche Zeitung 28 Juli, 2000; Hannover Allgemeine Zeitung 29 Juli, 2000）。

しかしながら、IFU は手放しに賞賛されたわけではない。IFU 参加者の国際性および研究領域は、「第3世界」出身者のための「開発問題セミナー」のようだと形容されている（Die Welt 29 Juli, 2000）。さらに、保守系の新聞は、ドイツで開催された大学でありながらドイツ出身の参加者が全参加者の5分の1ということから、ドイツ連邦政府およびニーダーザクセン州政府、ドイツの各財団の IFU への財政援助に対して批判的立場をとっている（Süddeutsche Zeitung 28 Juli, 2000; Die Welt 29 Juli, 2000）。900人の学生のうち、何らかの奨学金を受けたのは、当初の予定の50%から80%に増えた⁴。これらの奨学金授与を含む IFU の合計1,800万マルク（約9億円）の運営資金が、目的、および期待される結果が不明瞭である「プロジェクト」の名の下に使われるのではないかという疑問も提起されている。つまり、これだ

けの資金を投資して、IFUの修了証書が通常の学術的な「大学の資格」に相当する価値があるかどうか問われているのである（Die Welt 29 Juli, 2000）。このことは、IFUがハノーバー市で同時期に行われた「万博のプロジェクト」の一環として設立された私立大学だという、市民の間で浸透している誤解とも関連しているように思える。実際、Süddeutsche Zeitung（28 Juli, 2000）やDie Welt（29 Juli, 2000）はIFUを「万博プロジェクト」の1つとして位置づける報道を行っている。初等教育から高等教育まで実質的な無償教育を実施してきたドイツでは、有償の私立大学が肯定的に捉えられることはまれである⁵。

このような文脈において、IFUにおける修得単位がヨーロッパ単位交換制度（European Credit Transfer System, ECTS）の原則にしたがって割り当てられていることは意義深い。ECTSはヨーロッパ域内の大学において適用されており、域外においても徐々に認識されつつある（ifu 2000c）。ヨーロッパで認められた単位交換制度に則ってIFUのコース・ワークを設定したのは、IFUの学術的な質への懐疑を払拭するうえで重要な効果を持った。

では、IFUに参加しなかったドイツのフェミニスト学生たちはこの大学をどう捉えていたのだろうか。IFUの学生と「女性とレズビアンのための異文化間夏期大学」を組織・運営する左派のドイツ人学生フェミニストたちとの話し合いの中で話題になった事柄を簡潔に記しておきたい。IFUがハノーバーで開催されるということを知って、当初、彼女たちは「幸福だった」と言った。フェミニズム研究、クィア・スタディーズ、ジェンダー・スタディーズはドイツの多くの大学でまだ真剣な学問領域だと捉えられていないからだ。そして、彼女たちはIFUがその現状を打開する契機になると信じていたという。しかし、彼女たちの期待は裏切られ、IFUに対して失望しているということを私たちは知らされた。その主な理由は次の通りである。万博が「人種差別主義的、国粋主義的で女性に懐疑的」であるにもかかわらず、「万博プロジェクト」としてIFUがドイツ国内で位置づけられていること、IFUが有償の大学であること、企業から資金援助を受けていること、研究コース参加のために選抜過程が存在していること、学問の主流を形成しているヨーロッパおよび北米から大多数の講師陣が招かれ、共通言語が英語であることによって、その他の地域出身の学生がIFUの内部で周縁化あるいはIFUへの参加から排除されることに結果しているのではないかということ、学生と教員の間にはヒエラルキーが存在すること、セクシュアリティの問題がカリキュラムに含まれていないこと、IFUをホストしている都市の市民とIFUの学生の交流がないこと、IFU学生の宿泊施設確保のためにハノーバー大学の主に外国人学生が夏の間退寮を強いられたことなどである。「IFUは女性の大学なのか、フェミニストの大学なのか」。彼女たちが投げかけた問題は、IFUの内部でも問題にされた。

IFUの学生たちからもIFUのポリシー、組織運営について批判的意見が聞かれた。そのうち、私の周りでよく議論されていた6点をここで紹介しよう。

託児所 「子どもの泣き声が聞こえると、講義に集中できない」という一人の講師の発言によって、3歳未満の子どもには託児サービスがないことがIFU開始後に判明した。IFUが子どもを持つ母親に託児所提供の約束をしていたにもかかわらず、である。母親学生が他の学生と同じように勉学・研究に集中できるように、「移動」研究部門では参加者からの献金を募り、ベビー・シッターを雇ってその場をしのいだ。その後、学長に請願書を書き、IFUの残りの期間ベビー・シッターを1人雇えるだけの資金を獲得した。それでも学生のボランティアがベビー・シッター・サービスを提供するという体制がIFU終了時まで続いた。これは、女性研究者の平等な研究参画を謳うIFUが、実際には母親の学生を公的空間

から排除する結果を招いたという意味で、深刻な問題であった。

過密なスケジュール 月曜日から木曜日まで、ほぼ一日中大学で講義を受け、ワークショップに参加し、プロジェクト・グループでの作業に追われ、独自の研究を進める時間が少なかったこと（金曜日にも IFU のイベントが度々企画されており、学生はそれに参加することが期待されていた）。3 ヶ月間で精神的にも体力的にも限界に近づいている参加者が多くいた。

西洋中心主義 これは開発途上国における移動専門家、あるいは開発途上国出身の講師がほとんど招待されていなかったこととの関連で学生から指摘された点である。

批判的教育学の欠如 準備した論文を学生の前でただ読み上げる講師が多すぎるという批判が、主に教育経験のある学生からなされた。プレゼンテーションの技術の向上、学生の参加を促すような講義を含めた教授法の改善を指摘する意見である。

IFU のヒエラルキー構造 トップダウン型講義中心の前期カリキュラム、学生を「出欠表」によって管理しようとしたこと、カリキュラムの内容が事前に既に決定されており、学生の要請によって基本的な内容が変更不可能であったこと（たとえば、セクシュアリティに関するトピックが予定された講義には全く含まれていなかったこと）などが問題視された。だが、キャンセルされた講義の時間などを利用して、学生が自ら講義やプレゼンテーションを行ったことも何度かあった。

組織面での不備 IFU の講義およびワークショップのスケジュールが事前に確定していなかったこと。ドイツに初めて滞る学生がレイシズムなどホスト国での問題を相談できる心理的なカウンセリング・サービスがなかったこと。またホスト・ファミリーと衝突があり、学期途中で宿泊施設を変わらなければならなかった学生がかなりいたこと。

さて、IFU の今後であるが、この点については、1 年間の修士課程を備えた大学院として再出発する計画があることが、「移動」研究部門の国際部門長であるミリヤナ・モロクヴァシッチの演説と IFU 閉会式の他のゲストの演説によって明らかにされている。3 ヶ月の夏期大学中に提起された種々の問題点は、これまでに概観した通りである。これらをどの程度解決できるかが、今後 IFU が存続していくことができるかどうかの鍵を握っている。それには、IFU の組織者、学生、講師間の対話が不可欠であろう。

2000 年夏に 3 ヶ月間開催された国際女性大学は、参加者ひとりひとりにいろいろな意味で有意義な研究と学びの場を提供した。女性大学の存在意義とフェミニズム研究という視点から IFU を振り返ると、フェミニズムの理論と実践を同時進行させることの難しさが印象に残る。参加者のネットワーク作りという点から考えると、国際女性大学は 1 年目にして多くの女性たちに満足感を与えたに違いない。ドイツにおける移民、市民権研究を進めている私個人の意見を言えば、見直すべき点は多くあるが、IFU は有意義なプログラムを提供してくれた。私の専門領域の政治・法律学では学ぶことが難しい手法も、学際的なプログラムの中では可能だった。ワークショップでインタビュー調査・解釈手法の手ほどきを受け、IFU の参加者を通して移民女性の団体にインタビューを行うことができた。

最後にもう 1 つ感想を付け加えたい。IFU への日本からの参加者は 900 人中 5 人であった⁶。日本から世界へ情報を発信できる研究者、学生が少ないという点を痛感させられた。英語、その他の国際的な言語による発言や発表を行えるような訓練が、今後、自分にとっても重要性を増してくるのではないかと考える。

様々な批判にもかかわらず、世界の女性大学にならって概念化され実施された IFU は、アメリカの女

子大学にとって「学際性と国際性という点で模範になる」とまで閉会式において賞賛された (Frankfurter Rundschau 12 Oktober, 2000)。これから IFU の組織者と卒業生がどのように IFU を発展させていくか楽しみである。その第一歩は、インターネット上ですでに始まっている。学生同士のメーリング・リストや IFU のホームページ、VIFU では、学生の意見交換が盛んに行なわれている。また、IFU の主催者側も、書面はもちろんのこと VIFU を通して新たな情報を発信している。「移動」研究部門代表としてアグネス・クーが閉会式のスピーチで締めくくったように、政治的实践も理論的研究も「IFU の終わりはわれわれにとってこれからの始まりである」。

(お茶の水女子大学人間文化研究科博士後期課程)

* IFU への参加に際して、筆者はドイツ学術交流会から奨学金の給付を受けた。記して感謝の意を表したい。

注

1. この点については、2000年11月14日に Calora Bauschke 氏から教示を得た。
2. 以下は15のプロジェクト・チームの名称。Migration, subjectivity and deconstruction—Looking at the intersection of sexuality, gender, class, ethnicity and race in biographies in the era of globalization; Self-employment, small entrepreneurship and trading in the context of migration; At your service, Madam! Domestic servants worldwide. Gender, class, ethnicity and profession; Prostitution, sex maids and mail-order brides, trafficking in women; Representation of migrant and minority women and men in films; Gendered representations of nation states at the EXPO 2000; Appropriation of public space by minority and migrant women versus their exclusion; Germany as an ethnographic field; Gender and war—women as victims, women as aggressors, women in resistance; International feminist networking, migrant networks and political and institutional strategies; Women’s rights are human rights: The debates, institutional changes and achievements; Tortured women and female political refugees: Transition of identities and ethnicisation of support systems; Workshop: From them to us to you and me or: from discourse to dialogue; Look back—look forward.
3. なお、女性のための夏季大学は1976年に始まったという見解もある (女性とレズビアンのための異文化間夏季大学実行委員会との対話)。
4. それでも奨学金を受けられずに、数名の学生が IFU への参加断念を余儀なくされそうになった。彼女たちのために学生有志が“WOMAN Fund”を結成し、IFU 開始前からインターネット上で基金を募った。募金活動は、IFU 開始後も続いた。
5. 1996年まで大学生は1年間数千円の社会貢献費を支払えばよかった。有償高等教育へ向けての改革が社会貢献費の値上げという形で徐々になされている一方で、現在も以前の無償高等教育を実施している大学が大多数である。連邦制のドイツでは、大学の授業料を含めた具体的な教育政策は各州ごとに決定・実行される。
6. なお、本学からは、私以外に徐阿貴氏 (人間文化研究科リサーチ・アシスタント、人間文化研究科博士後期課程) が参加した。

参考文献

- ドゥーデン、バーバラ&クラウディア=フォン=ヴェールホーフ『家事労働と資本主義』丸山真人編訳、岩波書店、1998年。
- Frankfurter Rundschau “Mit dem Kopf der anderen denken: An der Internationalen Frauenuniversität forschen 900 Nachwuchs-Wissenschaftlerinnen aus 115 Ländern,” 3 August, 2000.
- Frankfurter Rundschau “Das Ende als Anfang: Ein ‘Motivationsschub’: Die Internationale Frauenuniversität zieht nach hundert Tagen eine erste Bilanz,” p. 6, 12 Oktober, 2000.
- Goslarsche Zeitung “‘Faszinierendes Projekt’ mit 115 Nationen: Erste deutsche Frauen-Uni,” 15 Juli, 2000.

Hannover Allgemeine Zeitung “Frauenuniversität: ‘Weltweit ein Signal,’” 29 Juli, 2000.

ifu. *Welcome to ifu: Practical Information*. Hannover: Hahn-Druckerei, 2000a.

———. *International Women’s University Course Program*. Hannover: Hahn-Druckerei, 2000b.

———. *Certification for Students: General Information*, 2000c.

Landeszeitung für die Lüneburger Heide “Neue Wege bei der Lehre: Erste Frauenuniversität öffnet während der Expo ihre Pforten,” 15 Juli 2000.

Schaumburg-Lippische Landeszeitung “Erste Universität nur für Frauen wird eröffnet: Projekt läuft drei Monate lang auf der Welt-ausstellung,” 15 Juli, 2000.

Süddeutsche Zeitung “Der weibliche Campus in Deutschland: Am Expo-Projekt ‘Internationale Frauenuniversität’ studieren in den nächsten 100 Tagen 900 Studentinnen aus aller Welt,” p. 6, 28 Juli, 2000.

Die Welt “Die erste Frauen-Uni einstweilen nur ein Projekt,” 29 Juli 29, 2000 (=http://www.welt.de.daten/2000/07/29/0729de182583.htx, 14 Oktober, 2000).

World-Wide-Web

vifu 2000 <http://www.vifu.de>, 9 November, 2000.